



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

愛知県支部

日赤あいち



東日本 大震災から10年

3.II
20II JAPAN

私たちは、
忘れない。

- ▶ NHK海外たすけあい
ご協力ありがとうございました！
 - ▶ 新型コロナ感染対策ガイドブック完成
 - ▶ 県内献血者1500万人達成キャンペーン
 - ▶ 名古屋オーシャンズの試合会場へ出展
 - ▶ クロスソポーターに聞く！！
株式会社ヤマナカ

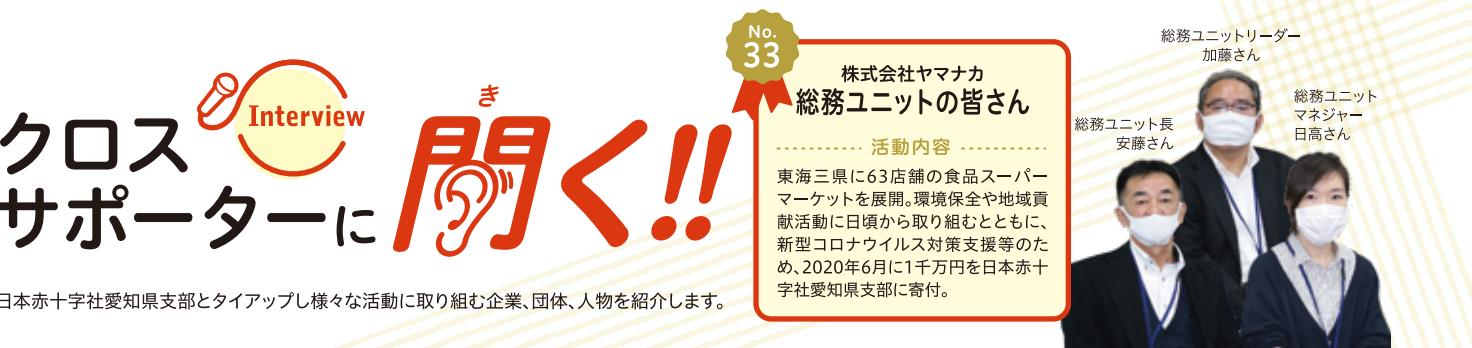


り患された方々の一刻も早い回復を心からお祈り申し上げるとともに、今後も日本赤十字社は全国の赤十字病院における患者治療、感染拡大防止のための情報発信、感染に関わる差別や偏見の防止啓発など、感染症の終息に向けあらゆる形で尽力してまいります。

謹んで新春のお慶びを申し上げます

平素から赤十字事業の推進に格別のご理解とご高配を賜り、心から感謝申し上げます。

昨年は一月に国内初の感染者が確認されて以降、新型コロナウイルスが全国で猛威を振るい、私たちの生活に大きな変化をもたらした一年でありまし



新型コロナウイルス感染症対策等の活動に
役立ててほしいとの思いを込めて寄付

を込めて寄付

TOPICS

トピックス

活動やイベントをご報告します

REPORT

第38回「NHK海外たすけあい」

ご協力ありがとうございました！

12月1日から25日までの期間中、NHK名古屋放送局と松坂屋名古屋店の2か所に特設ブースと受付窓口を展開したほか、県内各地で赤十字奉仕団による街頭募金活動を実施し、多くの方々にご協力をいただきました。いただいたご寄付は緊急救援から復興支援、開発協力に至るまでの赤十字の海外支援活動に充てられます。活動状況は日本赤十字社の公式ウェブサイトなどを通じて発信して参ります。

左／感染対策を十分に行い、NHK名古屋放送局での受付も例年通り実施
右／松坂屋の特設ブースでは海外赤十字の活動紹介や支援物資のサンプルを展示

NEWS

県内献血者数1500万人達成

記念キャンペーンを実施

愛知県赤十字血液センターが開設された昭和37年からの県内献血者数が、昨年8月に累計1,500万人に達しました。皆様への感謝の気持ちを込めて、キャンペーンを実施します。献血にご協力いただいた方に、「感謝のメッセージカード」「ポケットin除菌アルコールスプレー」をプレゼントします。

新型コロナウイルス感染症による影響で献血バスを配車予定であった献血会場での献血実施が中止されるなど、血液の確保が厳しい状況が続いています。そのような状況にも関わらず、輸血を必要とする患者さんのために多くの方々に献血のご協力をいただきました。これからも安心安全な献血会場を保ち、新しい生活様式に合わせた献血を推進し輸血用血液を安定的に医療機関へお届けいたします。今後も皆様方のより一層のご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

【期間】令和3年2月1日(月)～14日(日)
【場所】県内すべての献血会場

献血会場はこちら



REPORT

新型コロナ感染対策ガイドブック完成

感染拡大防止のため、県内に幅広く配布

新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、愛知県支部では感染制御学を専門とする日本赤十字豊田看護大学 下間正隆教授の協力を得て、新型コロナウイルスの感染対策ガイドブックと絵本を作成しました。

広く一般の方々に活用いただけるよう、新型コロナウイルス感染症を予防するためにはどのような行動が望ましいかをイラストを用いてわかりやすく解説する内容となっており、12月中に県内の市町村や郵便局、青少年赤十字加盟校などに配布されました。当支部ホームページからもご覧いただくことができますので、ぜひ感染対策にお役立てください。

左／感染対策を十分に行い、NHK名古屋放送局での受付も例年通り実施
右／松坂屋の特設ブースでは海外赤十字の活動紹介や支援物資のサンプルを展示

REPORT

名古屋オーシャンズの試合会場へ出展

オークション売上金のご寄付をいただきました

11月22日、愛知県支部とパートナーシップ協定を結ぶ名古屋オーシャンズの試合会場で、昨年度同チームが実施したユニフォームオークションの売上金から100,000円の活動資金のご寄付を頂きました。この日は、新型コロナウイルス感染症の影響で長らく無観客試合が続いている同チームにとって、今季初の有観客試合ということもあり会場には多くのファンが集まりました。盛り上がる試合会場で寄託式が催されたほか、赤十字CMの投影や、事業紹介ブースを通じて、皆さまからいただいたご寄付により行われている赤十字の活動についてご紹介しました。



矢野きよ実さんに聞く 被災者の心の声と私たちにできること

矢野きよ実さん
名古屋市大須出身
のパーソナリティー、
書家。

3.11の記憶と「忘れない」のかたち

発災直後の街頭募金活動から始まった矢野さんと赤十字の協働。赤十字救護班と共に訪れた石巻市雄勝での出会いをきっかけに、矢野さんは「書で心を開く『書きましょう』」をはじめとした支援を通じて、被災地に寄り添い続けてきました。

「書で心を開く」とは
どのような支援なのでしょうか？

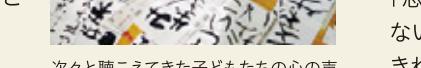
「子どもたちの心の中にあるものを、そのまま筆を通して書いてもらう授業です。誰にも言えず抱えている苦しい気持ちを吐き出してもらいます。私たちは何も聞かずに笑顔で寄り添うだけ。泣いてはいけません。泣いたら子どもたちは吐き出せませんから。30分くらい絆つ子どもたちは自然に語り始めます。それは私たちが被災していない『よそもの』だから。子どもたちの書には“死がない”とか“生きたい”とか、そんな年の子どもからは普段出ないような言葉が並び、震災を通じてそれだけの経験をしてきたのだと感じました。」

震災から10年が経った今、私たちにできることは何でしょうか。

「被災地の風景は変わったし、子どもたちも皆学校に行けるようになりました。でも子どもたちの辛い記憶や悲しい気持ちではなくなりません。心の声は変わりません。だから、辛さや苦しさをわかってくれている人、大丈夫？と気にしてくれる人がいることが支えになります。書き終わった書を、子どもたちは「皆に見せて」と言います。「忘れないで」と願っているんですよ。ただ、「忘れない」という言葉は少し強すぎるかもしれないし、無理に思い出せない人もいるでしょうから、私は皆さんに「想う」ことが大切と伝えたいです。きれいな景色をみたときやおいしいものを食べたとき、それを共有したい大切な人の顔が浮かぶそんなときに、私は東北の子どもたちの顔と一緒に思い浮かべて、最もいいことがあるといいな、と想うんです。相手を想うこと

はきっとその相手にも届くと私は信じています。」

それぞれの「忘れない」のかたち



次々と聴こえてきた子どもたちの心の声

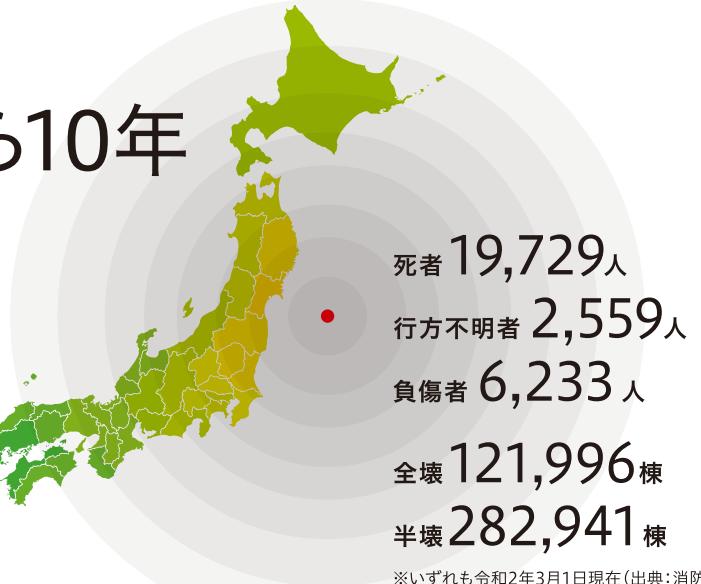
想う

東日本大震災から10年 東日本大震災から10年

～あのときの記憶、そして今、私たちにできること～

2011.3.11

東日本大震災から10年



『発災直後』
愛知県支部の3月11日、14時46分からの記録

未曾有の災害、一刻も早く被災地へ
『被災地へ』

不足する情報、混乱の中で「北へ向かえ」

『石巻赤十字病院に全国から救護班が集合』
『被災地へ』

『防災・減災へ』
『愛の備え』
『緊急救援からこころのケアまで』

『南海トラフ地震に備えて』
『東日本大震災の教訓活動を経験した。応急救護だけでは救えない命があった。この状況に對し、日赤が取り組み始めたのが防災教育事業です。』

『東日本大震災で亡くなった方の9割は津波による溺死でした。応急救護だけでは救えない命があった。この状況に對し、日赤が取り組み始めたのが防災教育事業です。』

『愛知県支部が継続して担当することとなつた石巻市を中心とした医療圈は、医療機関の多くが壊滅的な被害を受け、いため、各避難所に診療所が開設され、医療調整役となる災害医療コードイニターの任命、長期間の救護班活動の拠点となる中継基地を備える』

『東日本大震災で亡くなった方の9割は津波による溺死でした。応急救護だけでは救えない命があった。この状況に對し、日赤が取り組み始めたのが防災教育事業です。